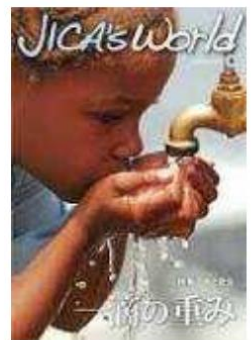


五月三十一日〔水〕

コラム音読 ①



実話か作り話かは、はっきりしないが、こんな話を聞いたことがある。昔、乾燥地の国から来た客人が、ひねると水がほとぼしる蛇口を見て「土産に欲しい」と熱望したそうだ。水道を知らなかったので、蛇口が奇跡の水源に見えたものらしい。

命の水に事欠く人は今も少なくない。国際協力機構（ジャイカ）の発行するジャイカズ・ワールド8月号が「一滴の重み」と題して特集している。その表紙、蛇口の水を両手で飲むアフリカの少女の写真が目を引き、したたる貴重な水は、透き通った宝石のような輝きだ。

水を欲して飲むとき、人はだれも真剣な顔になる。少女も一心そのものだ。のどを通った水は胃に落ちて五体をみたす。この蛇口ひとつに、どれだけの人が命をゆだねているのだろうかと思う。

日本では、1人1日平均で約370リットルも使うそうだ。体重六十キロなら重さは6倍を超す。片や世界には安全な水を得られない人が8億人近くいる。水は天下の回りものだが、「一滴の水の格差」は、はっきり目立つ。

「水道のせん」という詩が、まど・みちおさんにある。へ水道のせんをひねると 水が出る／水道のせんさえあれば／いつ どんなどころでも／きれいな水が出るものだというように……と、日ごろのかん違いを注意する言葉が続く。そう、蛇口は魔法の水源ではない。

乾いた大地から一滴一滴をしぼり取るように生きる人々に、思いをはせたい。天与の水を当たり前とせず、水清くゆたかな国土への感謝とともに。

六月十三日〔火〕

コラム音読 ②



ずいぶん昔のことだが、東京の上野動物園に三頭の象がいた。ジョン、トンキー、そしてワンリー。芸をしては、お客さんを喜ばせていた。第二次世界大戦が始まった後でも、来園者が減ることはなかったという。

「もし爆弾が動物園に落ちたら、猛獣たちが外へ出て、きつと人間に害を与えるだろう。」軍はそう言って動物たちを殺すよう命じた。

クマや虎に続いて三頭の象を殺すときがやってきた。飼育係は象たちを殺したくなかったが、軍の命令に背くわけにはいかなかった。ジョンから始めることにした。ジョンの好物はジャガイモだった。飼育係は毒の入ったジャガイモを混ぜて食べさせることにした。でも、賢いジョンは、毒が入っていないイモだけを食べた。

そこで、注射をすることにしたが、皮膚がかたすぎて針が刺さらなかった。最後に選んだ方法は、食べ物は何も与えないということ。十七日後にジョンは死んだ。そして、トンキーとワンリーの番が来た。二頭はいつも愛らしいまなざしで

人々の心を優しい気持ちでいっぱいにくれた。しかし、今、飼育係は二頭に食べ物を与えることができない。檻の前を歩くと二頭は立ち上がり、鼻を高く持ち上げた。芸をしたら食べ物と水をもらえらると思っただからだ。それからしばらくしてトンキーとワンリーは動くことさえできなくなった。いつものように澄んだ目をして、ただ横たわっていた。飼育係は、あまりにもつらくて、弱り切った二頭の姿を見ることができなかった。そんな日々の中でも、容赦なく爆弾は東京を襲い続けた。そして数日後、二頭の象は息を引き取った。そのとき、上空を飛ぶ敵の飛行機に向かって飼育員は叫んだ。「戦争をやめろー！」

後にトンキーとワンリーの体を検査したところ、胃の中には何一つ残っていないかった。――一滴の水さえも。

現在、三頭の象は、上野動物園の記念碑の下で他の動物たちとともに安らかに眠っている。

コラム音読 ③

六月二十三日〔金〕



まだ幼い息子、ボブシーは白血病にかかり、すでに残された命の時間は限られていました。今日もベッドに横たわる息子の手を取ると、母親は「大きくなったら何になりたいの？」とたずねました。「僕、消防隊員になりたい。だって本当にかっこいいんだ。」ボブシーの最後の願いをかなえるには一刻の猶予(ゆうよ)も許されなれなかつた。母親は、すぐに地元の消防署に連絡を取り、息子の願いについて話をしました。消防隊員はその願いをかなえるため、3日後にボブシーを迎えにきました。消防隊員が目の前に現れると、ボブシーは大喜びです。何と、彼の体のサイズにピッタリと合わせたユニフォーム、ヘルメットが用意され、ボブシーはその日1日を「名誉消防隊員」として消防車に乗り込み、消防隊員と一緒に食事をして、そして訓練まで受けました。病気であることも忘れるほど元気になり、周りの者は、ふと病気が完全に治ったのではと思うほどでした。

このような喜びは、想像以上の効果があると医師は述べています。

しかし、病は確実にボブシーの小さな体をむしばみ、いよいよお別れの時が来ました。連絡を受けた消防隊員は、消防車に乗って病院まで駆けつけました。消防車からスルスルとはじごが上がると、消防隊員は次々にはしごを登って3階のボブシーの病室に入っていきます。皆、彼を抱きしめてお別れを言います。

少年は、隊長を見上げました。

「僕は今でも本当の消防隊員なの？」

「もちろんだとも、今だって消防士だ。僕たちの仲間なんだよ。」

この話がきっかけとなり、「メイク・ア・ウィッシュ財団」が設立されました。財団は、ボランティアや寄付金を使って、死を目の前にした子どもたちの最後の願いをかなえる手助けをしています。

コラム音読 ④

七月六日〔木〕



このごろ新幹線や飛行機、長距離バスで、前の乗客から「イスを倒していいですか」と声をかけられることが増えた。そのひと言で旅の気分はほんのり温まる。かと思ふと無言でグワツと倒され、一気に冷える日もある。

外国の航空路線で少し前、座席の倒し方をめぐるトラブルが続いた。「急に倒されてスマホが割れた」「頼んでも戻してくれない」。後ろの客が前の客を殴って警察へ連行された。交通手段が高速化するにつれ、乗客の頭に血がのぼるスピードまで速まったのだろうか。

鹿児島交通で長距離バスを運転する村瀬芳尚(ヨシナオ)さん(三十九歳)はもめないうよう一計を案じた。走り出してすぐマイクで語りかける。「後ろの方が気になって席を倒しにくいつてことありますよね。後腐れのないよういま一斉に倒しましょうか。はいドーン」。

効果はてきめん、乗客が苦笑いしつつこぞ倒しにかかる。運転手が言うなら気兼ねはいらない。さえた車内放送をツイッターで紹介した客がいて、評判は広がった。乗務マニュアルに書かれていたわけではない。「倒す倒さないでもめると、終点の福岡まで六時間ずつと雰囲気が悪くなります。僕が声かけ役を一手に引き受けようと考えました」。

座席倒しトラブルの多さに手を焼いたイギリス航空業界には、全席を倒せないよう固定した社もある。だが、乗る側の快適さでいえば、『一斉ドーン』の村瀬さん式のほうが格段に上だろう。費用はかからず警察沙汰にもならない。何より旅の気分が温かくなる。

九月二十一日(金)

コラム音読 ⑤

中国・湖南省の山岳地帯が舞台の実話に基づく映画『山の郵便配達』。



父と息子が、人ひとりがやつと通れる険しい山道を120キロにわたってひたすら歩き続ける姿を描いている。交通手段がほとんどない山村(さんそん)に長年郵便物を届けてきた**初老**の父に代わって、息子が仕事を引き継ぐ日がやってきた。映画は、父にとつて最後の仕事、息子にとつて最初の仕事となる2泊3日の旅を追いかける。

息子は、郵便物がぎつしり詰まった重いリュックを背負う。その後を無言でついていく父。長い間、父は仕事のためほとんど家にいなかった。そのせいで父と子の絆は薄く、息子は父親を「お父さん」と呼んだことがなかった。だから、ただ黙々と歩く。

ある村に着いた。目が見えない老婆に軍隊に行った孫からの手紙を渡す。仕送りが同封されている。老婆はお金を包んでいた白い紙を渡し、「手紙を読んでくれ」と頼む。父は読み上げる。「おばあさん、目はどうですか?腰の具合はどうですか?私は元気です。なかなか帰れないので、困ったことがあったら郵便配達の人に頼んでください…」

老婆は言う、「いつも同じだな。」父は息子に手紙を渡して、「続きはお前が読め」と言う。息子が手紙を見る。白紙だった。息子は戸惑いながら何も書かれていない紙を見て、「一人暮らしは大変だね。帰ったら一緒に住みましょう…」と続けた。何年も父があの老婆に白紙の手紙を読んできたことを知り、「次は俺が代わりに」と考える。

川があった。橋はない。息子は膝(ひざ)まで川に浸(ひた)かって向こう岸まで渡り、リュックを下ろし、また戻ってきて父を背負い渡る。父は息子に背負われながら、息子が小さかった頃、息子を肩車して夜祭りへ行った日のことを思い出し、あふれてくる涙を必死で堪(こら)えた。息子は、この冷たい川の水で父が膝を痛めたことを知る。そして、背負った父が郵便物より軽いことを知る。

ずっと昔、父が崖から落ちて村人に助けられたことや、父と母が郵便配達途中で出会ったことを知る。2泊3日の旅は父の生き様そのものだった。自分の知らない父の人生があった。心に隔(へだ)たりをもっていた父と子は次第に心を通わせていった。

十月四日(水)

コラム音読 ⑥

小柄なおばあちゃんがアメリカの若者たちから熱狂的な支持を受け、人形、Tシャツ、それにタトゥーまでにその顔や名前が使われた。お堅い仕事の頂点とも言うべき米最高裁判事なのに、その名の頭文字から、親しみを込めて「RBG」と呼ばれた。今からちょうど二年前、87歳で亡くなった「ルース・ベイダー・ギンズバーグ判事」。彼女は貧しいユダヤ系移民の家庭に生まれた。「すべてに疑問を持って」という亡き母の言葉を胸に努力を重ね、名門ハーバード法科大学院に進んだ。1956年当時生徒500人中女性は9人で、女子トイレすらなかった。家事も育児も分担する夫の協力のもと、成績はトップで卒業したが、女だからという理由で雇ってくれる法律事務所はひとつもなかった。その後、夫が病に倒れ、看病をしながら2人の子どもを育て、弁護士になった。

長く女性の権利向上に尽くしたが、優れた働きはそれだけではない。妻に先立たれ子育てをする男性が「一人親手当」を求めた裁判でも勝訴する。「性差別は女性だけでなく万人を傷つける。母親と同じ権利を父親にも」。差別が残っている法律によって、女性も男性も不利益を受けると訴え続けた。

女性として2人目の最高裁判事となったのは1993年。女性の入学を認めない「軍人養成学校」の慣例を法律違反だとしたほか、黒人や性的少数者の権利も擁護する。信念が揺らぐことは決してなかった。

「判事9人のうち何人が女性なら十分ですか?」と問われたときには、いつも「9人」と答えた。「こう言う」とみんな驚きます。これまで全員が男性だった時は、誰も疑問をはさまなかったのに」

時代とともに、古い法律だけでなく、頭にこびりつく固定された考え方も変えていかなければならない。RBGが一生をかけて燃やし続けた情熱の火を、私たちの世代が絶やさぬよう改めて心に誓う。



十月二十六日(木)

コラム音読 ⑦

十代の頃を味覚にたとえるなら、どんな味になるのだろう。甘酸っぱさか、ほろ苦さか、汗と涙の塩からさか。見えない壁につき当たり、自分とは何かと悩む日々。だからこそ、舞い込んできた一片の言葉に支えられることがある。

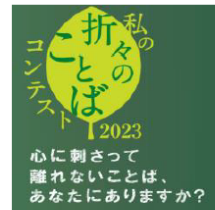
中学生による「私の折々のことばコンテスト」に約2万6千編の応募があった。

中学3年の檜山綾(ひやまあや)さんは、植物図鑑で「日本の植物学の父」として知られる牧野富太郎の「雑草という名の草はない」という言葉に出会った。この言葉が伝えようとしていることは、植物だけでなく人にも当てはまるなと思った。自分にとって周りの人はただの他人でしかなくても、人には一人ひとり名前があつて、それぞれの人生がある。自分中心の考え方で生きていると、ついそのことを忘れてしまう。

高校2年の川崎凜(りん)さんは、テスト漬けの生活に「疲れた」が口癖になっていた。そんな時、部活にも勉強にも打ち込む友人が笑顔で「もうほんとに死にそう！でも忙しいってしあわせ！」。世界がぐるりと変わったという。そう、全力でがんばれるって、なんと素晴らしいことだろう。

中学2年の當中凜己(とうなかりき)さんは、テニスの試合の前に兄がくれた言葉を挙げた。「負けた時の言い訳をゼロにする事がスタート地点。道具の手入れや体調管理など、準備の大切さを教わった。言い訳を重ねて「負けたのは自分のせいではない。」と自分を甘やかしたくなるのは、若者ばかりではない。

完璧をめざしすぎて、絵も音楽もあきらめたという中3の真崎海京(まざききょう)さんは、芸術家・岡本太郎の著書にあつた「自分を笑ってごらん」にハツとした。笑ってしまうほど不器用な人が情熱を注いだ作品にこそ、手作りの喜びは宿るのだと。サイダーのようにさわやかな一言でもいい。濃いコーヒーのように苦い一言でもいい。胸にしみわたる言葉に、どうか出会えますように。



十一月十六日(木)

コラム音読 ⑧

オーストラリアの自転車乗りにとって、春はゆううつな季節である。地元で『マグパイ』と呼ばれる『カササギフェガラス』という鳥が、走行中にいきなり襲ってくるのだ。その凶暴さは想像を超えており、毎年何千件もの襲撃が報告されている。

くちばしを鳴らして急降下し、背後からヘルメットをガツンとつつく。耳や首にあたりと流血するほどのけがを負う。4年前には、70代の男性がマグパイを避(よ)けようとしてフェンスに激突し、死亡する事故があつた。

専門家によると、春の繁殖期にひなを外敵から守る行為だという。「速く動く物体の一番高い部分」を狙うため、自転車のヘルメットは格好の標的だ。着用は義務だけれど、現地の人は「罰金を支払うのが嫌というより、ノーヘルでつつかれたら命取りになるからヘルメットをかぶる」と言う。

警察庁の調査では、自転車事故で亡くなる人の約6割が頭部の損傷によるという。そこで、日本でも今年の4月から自転車でのヘルメット着用が「罰則なしの努力義務」になった。

4月のある日のこと。東京都内の住宅街でヘルメットをかぶっている人は1割もいなかった。ノーヘルを見た警察官が指導する様子もなかった。「努力義務」⇨「自発的な『努力』」に、拘束力がある『義務』を組み合わせることに難しさを感じた。

過去に「努力義務」から「義務」へと移行した例はいくつもある。その一つがシートベルトの着用である。今では着用が当然のシートベルトも、かつては「努力義務」だった。

鳥が襲撃する危険はなさそうだが、事故から身を守るために、先日、通気性の良さそうな野球帽型のヘルメットを注文してみた。

